



フ
レ
ー
ベ
ル
ゼ
ミ

立川多恵子

埼玉県は人口急増県の一つである。昭和三十年に約二二万六千人だった県の人口は、昭和五十年には約四八万二千人になった。約二・二倍の増加率である。

そこへもってきて、幼児教育に対する人々の関心は、近年ますます強まってきた。

若い夫婦の中には、県内に転居するため、子どもの入園を心配して、役所や、幼稚園にあらかじめ相談する人も出た。

県内の主な市部では、入園願書受付日には、早朝から幼稚園の門前に行列ができるのが通例だった。

園によっては地域の親達に頼まれ、やむおえず廊下で保育するところさえ出た。

こうして幼児教育ブームが人口増に拍車をかけ、県内には、幼稚園・保育所が次々に増設されるようになった。

昭和三十年には、公私立合わせて、一二三園だったものが、昭和五十年には六一三園にふえた。

そのさい園創設に大きな力を貸したのが、若い男性たちだった。幼児教育に関して素人が多かったのだが、幼稚園教育に対する取り組み方は極めて意欲的であり、だれいとうとなく幼児教育についての理解を深めるために研究会を持つとうではないかという話が出た。

会員数十余名、第一回会合は、「教育計画の立て方」についての話だったと記憶している。会員は、教育計画といえど、小学校以上のやらせるための指導計画しか考えられず、理解に苦しむ点もあった。

二回目の講師は筆者であり、「保育実践」について具体例を示して話した。実さい子どもと触れ合う機会の少ない男性に、子どもとのかかわりの機微をどう伝えたらよいか

悩んだ。

会員たちは、幼稚園では「何をどう教えたらよいのか、それをまず知りたい」と思っていた。子どもと交流のない人は何を話しても頭でしか受けとめられない。一日一時間でもよいから子どもとあそぶ機会をもっと欲しいと話した。しかし実さいは、バスの運転や事務的な仕事が多く、子どもとあそべる時間はなかなか生み出せないというのが現状である。それでも翌月の会合で、ある会員から次のような発言があった。「A夫が私に『おはよう』をしないので気になっていたが、昨日、とび箱を出して、じっくりつきあったら、今朝は、大声で『おはよう』と飛んでくるんです。子どもとつき合うということは、お互いにわかり合うことなんです」と。

会員の一人一人が子どもとつき合う機会をふやして、こうした体験を積み重ねて欲しいと願った。

次の会から私もメンバーの一員になった。講師の選定は会員同志話しあってきめた。最初の頃は講師の話を一方向的に聞く会だったが、やがて仲間間で何かテーマをもって研究してみようということになった。

最初に手がけたテーマが「保育者の困る子どもの指導」

である。若い先生の相談相手になってやれたらという願いから生み出されたテーマである。

幼稚園に戻って、先生に「どんな子どもの指導に困っているか」聞いてリストアップし、話し合うことになったが「保育者の困る子ども」というのは、保育の在り方を変えれば、困らない子どもにもなる、むしろ「困る子どものいない保育」を勉強していこうということになり、会員からレポーターを出して話し合うことにした。

最初は、児童臨床の専門家のK先生が引き受けた。次回は私が引き受け、「生活指導」についてレポートした。特に話し合われたのは「挨拶」についてである。会員の中には、

「私の園では入園式当日、お互いに挨拶をキチンとしましょうと話している。親がお互いに挨拶をすれば、子どもも自然に出来るようになると思う。園長は人間関係の始まりは挨拶からだ」と主張しています。また別の会員は、

「いや挨拶だけを強要するのはおかしい、お互いの気持ちさえ通じていたら、挨拶は、『オス』だっていいではないか、先日、戸外で私の姿を見つけた子がいて、走ってきて背中をドンとたたいた。ふりかえったら、年長頭の○夫だった。

私は可愛かったので抱きかかえた。挨拶が出来る前に、お互いの気持の出会いが必要だ。それがあれば子どもも必要な時、必ず上手に挨拶してくれると思う」等、さまざまな意見が交換された。

次の回は、会員の一人に協力してもらい、実さいの保育場面をビデオに取って話し合いの材料にした。

場面は幼児のどろあそび、四人の男の子（四歳・五歳）が昨夜の雨で園庭の隅に出来た水たまりの二つを一つにして、一時間位かけて、池を作り、鳥をかため、トンネルを掘ってあそんでいたが、仲間の一人が裸足になると、次々に裸足になり、池の中に入り込み、ピチャ、ピチャ足でどろの感触を楽しんでいた。そのうち手で、どろんこをまるめ始めた。どろだんごが、それぞれの子どもの手で数個ずつ出来上った頃、一人がどろだんごを手にとると、園舎の壁に投げつけ始めた。一つ、二つ、三つ、どろだんごは白い壁にへばりついた。他の子も手にどろだんごを握ると壁に投げつける。壁はどろだんごで模様が出来た。最初に投げ始めたT夫は、何を思ったか、そばにあったバケツの水を、どろんこになった壁に打ちつけた。壁の模様は多少うす

くなった。今度は手で拭き取ろうとする。模様は大きく広がり、アブストラクトな壁画になった。

T夫は、水道まで走って行って、バケツに水を入れると戻ってきた。どろんこ壁画の前には、子どもたちが一ぱい集まった。バケツを持って戻ってきたT夫は、余りの人だかりにおくれをなしたが、そのまま自分の部屋の方へ歩いて行ってしまった。

やってきた担任の先生は驚いて保育室に戻っていった。そして、どろだんごを壁に投げつけてあそんでいた子どもたちと一緒に雑巾やバケツを持って壁画のところへやってきた。まず担任が率先して、どろんこを落とし始めた。子どももそれぞれ手に持っていた雑巾で壁のどろをこすり始めた。なかなか消えない。雑巾をゆすいではふいてみる。何度も何度も拭いているうちに大分どろがおちた。そばでみていた男の先生たちはホースを持ち出して、高いところのどろを落とす。

私もバケツの水かえを手伝った。三十分位で壁面はもとの白さに戻った。担任は「きれいになってよかったね」と子どもたちに語りかけた。

映写時間は二十五分、会員はビデオを見ながら、盛んに

ささやいた。

会員「やった、やった、ほくもやった、思い出すナ」

会員「わたしもやった、叱られたけど……」

私「先生方は、こうした経験をお持ちの方が多くいようですけど、何時ごろですか」

会員「ほくの場合は小学校の時かな」

私「私の場合は小学校へ入る前だと思う」

私「どこでやったのですか」

会員「ほくは学校で、校舎の壁に」

私「わたしは土べい」

私「ほくは蔵の白い壁」

私「叱られたでしょう」

会員「叱られましたね。大あわてで逃げました」

私「わたしも、大声でどなられて、あわてて逃げる時、

溝に落ちたりして……」

会員にそれぞれ同じような思い出があるのは楽しかった。私自身も自宅の壁面にどろんこを投げつけ、母に叱られた日のことを思い出した。

私「近頃地域でこんなあそびが見られますか」

会員「見たことないですね」

私「投げ場所がないのでは……」

私「いや、投げ場所があっても、投げようとする意欲もなくなってしまうんですヨ」

会員「どろ投げが、子どもの成長に不可欠とまでいえないけれど、『いたずら』によって、エネルギーを発散することって大切じゃないかな」

会員「いたずらをして叱られる、それでもこりずに又やる」

私「叱り手のいることも大切でしょう」

私「幼稚園ではどうでしょう」

会員「ほくの幼稚園ではみられないナ」

私「『ほくのところも見たことない、どうしてかな』」

私「ほくのところでは昨日もやりました、なにしろ隣りが小学校の体育館です。その白い壁面に向かって投げつけるんです。」

昨日は体育館の窓が開いていたので、中まで入りこみ、床を汚してしまいました。子どもを連れてあわてて校長先生のところへあやまりに行きましたが、『お宅の子どもは元気ですね』と笑って許してくれました。子どもと一緒にバケツと雑巾をもって掃除に行きましたが、なかなかおちなくて困りました、用務員の

おじさんにこっぴどく叱られ、子どももこりた様です」
会員「ほくの園は、厳しすぎるのかナ、子どももいたずら
をしないので謝りにいく心配はありませんが、その反
面、子どものびのびした行動が見られないような気
がします」

会員「先生、うちの園でもやっていますヨ、今朝も水たまりで『ピチャピチャ』と。とめようと思ったのですけど、しばらくみると、靴先だけぬらして止める子と、頭まではねを上げる子がいます。その子の服は、後でかえてやらなければなりませんでした……」

私「頭の先まで汚す子はどんな子ですか」

会員「けんか早くて、時々友だちを泣かすこともあるし、みんなで何かしている時、はみ出すことも多い子です。発想のゆたかさはクラス一です」

私「いたずらっ子と、発想の面白さの関係について、一度ゆっくり話し合いたいですね……」

ビデオをみての話し合いは、いろいろな方向に発展した。若い経営者を主流としたフレールベルゼミも、メンバーは

六年間に、少しずつ入れかわった、近頃では、保育所や幼稚園の先生も参加して、男のふとい声に交じって、若い女の笑い声もきかれる楽しい雰囲気になった。
月一回、ウィークデーの六時半から九時頃まで、それぞれ疲れた体を休めたい時間に会員たちは明日の保育のために語りつづけている。

(十文字学園女子短大)

◆編集部から

この研究会だよりのシリーズでは、幼稚園・保育園の、園内での研究会ではなく、より広い人々の集い合いから、保育を探究している研究会を紹介していきます。そのような研究会を開かれている方々は、ぜひ御一報下さい。